

淨瑠璃坂の討入（第四回）

高田 友

（十五）

親の仇討たむと身を挺したる奥平源八、興禪寺事件の砌には僅々十一歳。討入に至りて漸く立志を迎ふ。^{十五歳}眉目秀麗の美形なれば、江戸八百八町の女衆、老いも若きも戀慕の情抑へ難く、歌舞伎役者をして顔色なからしむるに至りけり。

討入たる源八、その出立豈圖らむ、振袖姿にてこそありけれ。町民の心を攔まむとて朋輩の演出したるに相違なかりけむ。戦國江戸の世には、美童の鍾愛せらるる、美女よりも甚だしき所ありと傳へらる。

一黨、主馬を打ち取りたる後、その鼻を削ぎて深澤村へ歸參したれば、源八これを見て欣喜雀躍、愈々父の意趣晴さむとの覺悟新たなり。命奪ひて鼻を削ぐは本朝戦ひの習はしにて、就中戦國の世、合戦に首級擧ぐとも首重ければ次なる敵を求めて刀槍を揮はむには仔細あり。不得已、鼻を切斷し、以て手柄の證據となむ爲したりける。

偕、源八の父内藏丞は學問に勤しむの餘りに武術は得手ならざりしかども、源八は仇討せむが爲に只管十八般を窮めむと志し、今や家門文弱の恥辱を雪ぎにけり。

深澤の地にても、從叔父（親の從弟）傳藏に師事して、擊劍日に日に鋭かりけり。

（十六）

源八が宿敵隼人、高島にて舎弟の討たれたるを聞く。事既に此處に至る。報復せずんば武士の一分立ち難しとて、時移さず深澤村に斬り込むに如くなしと思ひ定めたるも、偕に高島にありし身内より、今呐喊せむとも返り討ちにせられて犬死せむこと必定なれば、算段整へて然る後に決行あるべしと戒飭せられ、涙を吞みて延引し、加ふるに敵襲を恐るの餘りに、高島を引き拂ひて竟んぬ。

こなた源八一黨、手ぐすね引きて待ち受け、斥候放ちて高島の形勢を窺ふに、隼人はや高島にあらずとの知見を得たり。

（十七）

主馬を討ち果して後、空しく時流れて兩年をぞ經る。

寛文十一年（一六七二）秋、隼人の潜窟露顯す。

思ひきや、岩槻城内に庇護せられてありしとは。この地、藩主は阿倍正春。家光に殉死したる阿部重次の息なり。前年高島より出で來れりとは推測せらる。

敵の所在突き止めたる上はもはや逃さじと、同じ調略を用ゐるに至りて、すなはち討入

旦夕に迫りたりとの虚説を流す。

抑々そも正春分家より出でたる假の藩主の身なりしかば、やうやく元服したる本家の若殿に其の座を譲りて分家に戻り、石高また十一萬五千石より一萬六千石といふ途方もなき滅封の憂目うきめに遭ふ。

さは、轉封を命ぜられたりしをりの奥平家と同斷、家臣を召し放つの外はなかりき。かくすればかくなるは必定、外様にして火種抱へたる隼人の岩槻に留まる、何條強談するを得べき。

(十八)

隼人つひに岩槻を去るの餘儀なきに至る。已而すでにして、天涯海角何處いづくにか身の措き處有之どこにあるべき。父・宗彌と俱に江戸を目指さずんばあらざるなり。

さは然乍さりながら、俸祿を得るの傳手つてなければ、金子の算段如何なりけむ。由來家老の家柄なれば少なからぬ貯へのありしところとは思はるれ。

然れども、三十人を率ゐて下野・信濃・武藏を轉々することよとせ四年に及び、江戸にては新たに二十人を雇ひ入れたりと傳へらる。その出費如何にして賄ひしや。

親類縁者に無心したるにやあらむ。若しは縁者も、源八一黨を返討にするを得たらむ曉には、隼人山形奥平藩に歸參叶つて、其の緣故に由り望外の實入りあるべしと算盤を弾きしか。雇ひ入れたる用心棒など杯浪人連は、爰ここを先途と武名を擧げて、仕官の一助たらしめむと圖りたるが如し。

(十九)

隼人、江戸にて見出したる新居は、牛込鷹匠町の一角なり。市ヶ谷より飯田橋へ向つて、堀割を右に見つつ歩き、未だ半ばに到らざるに左へ上る坡さかあり。「浄瑠璃坂」と言ふ。旗本屋敷の並ぶ閑靜なる地なれば、敵持かたきもちの身、庇陰ひいんを恃むに足るべしとは思ひたりけむ。

「浄瑠璃坂」なる名の由來は諸説あり。

其の一は坂上に人形浄瑠璃の小屋存したればなりと言ふ。

るりこう

あるいはまた、近隣に眞言宗の一寺ありて、その本尊すなはち薬師瑠璃光如來。これが如來は東方浄瑠璃光世界の教主なればとてなり。

(令和八年三月十五日受附)